

現在の総曲輪通り商店街も、外堀を埋め立てて誕生した繁華街です。^{いずみきょうか}泉鏡花作『黒百合』（明治32年刊）の中に、次のような文章があります。

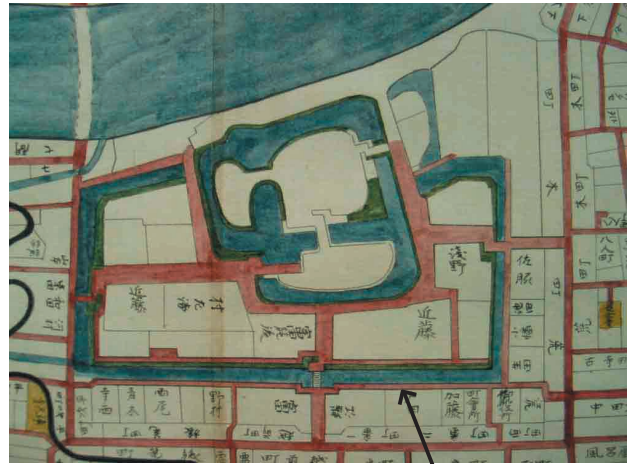
ばすえ とやま にぎや そうがわ おおてさき しる そとほり
 場末ではあるけれども、富山で賑かなのは総曲輪という、大手先。城の外堀が
 のこ みずたまり かたがわまち こあきゆうど のき なら ほり そ ちゅうやこうたい ほしみせ
 残った水溜があって、片側町に小商賈が軒を並べ、壕に沿っては昼夜交代に露店
 だ
 を出す。

つまり、明治時代中ごろまでは外堀の一部が“水溜り”として残っていて、現在の総曲輪通りを挟んで南側には商店が、水溜りのある北側には、道路に沿って昼夜露天商が並んでいたのです。後にこの水溜りも埋め立てられ、現在のような道路の両側に商店が建ち並ぶ商店街となりました。



昭和初期の総曲輪通り

明治初期、道路の向かって左側には、まだ堀の一部が残っていました。



現在の総曲輪通り

天保2年（1831）の富山城下図の富山城部分です。

こんなこともありました その2

はいはん ちけん かいたくがかり
 廃藩置県の直前、明治3年には藩の開拓掛が、金沢から蓮根の根を取り寄せて外堀に植えたという記録があります。恐らく食用にするためだったのでしょう。

戦前から終戦後にかけても、堀に蓮根が繁殖していました。この写真は昭和26年の堀の様子です。

